慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	金融業務における「範囲の経済」
Sub Title	
Author	大橋靖雄(Oohashi, Yasuo) 青井倫一
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1998
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1998年度経営学 第1416号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001998-1416

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	青 井　　研究会	学籍番号	89728189	氏名	大橋 靖雄

（論文題名）

金融業務における「範囲の経済」

（内容の要旨）

日本の大手銀行は、規制、顧客、競争相手という外部環境の変化と、不良債権償却等による投資余力の減少という内部環境の変化が起こったことにより、業務分野の「選択」を実行することが急務となっている。

投資余力に大きな制約がある中での「選択」には、「範囲の経済」の概念を用いることが有効である。なぜなら、そのような状況においては効率化を生まない業務分野の排除が徹底的に求められる必要があり、「範囲の経済」をもたらす有効な「選択」が銀行の効率化に繋がると考えられるためである。

本論文では、このような問題意識から米国・欧州・日本の銀行について、金融業務の「範囲の経済」を実証分析している。結論としては、米国・欧州において「商業銀行業務」と「投資銀行業務」の間に「範囲の経済」が有効であることが示された。実証分析では更に、「ユニバーサル・バンク形態」と「持ち株会社形態」における差異、及び時系列的な差異について分析するとともに、「収入面の範囲の経済」という考え方を提示している。

以上のような分析に基づいて日本の大手銀行の戦略を検討した結果、今後の成長が見込まれる「投資銀行業務」に取り組むとともに、情報力の低い顧客をターゲットとしつつ強みのある「チャネル機能」を中心とするシステムを作り上げることが、「商業銀行業務」と「投資銀行業務」の「範囲の経済」の有効な獲得に繋がることを示した。